

2011年度に国際センターが実施・協力したFD支援費等対象プログラム報告書

2012年3月8日

国際センター

I. FDの意義と実施の概要

授業評価や講義の充実、シラバスの公開等のFD活動は進んでいるが、教授法や成績評価システムの国際的標準化に対応するうえでの海外研究者との交流や英語による講義の実施が重要になっている。津田塾大学では、国際センターにおける国際的な学术交流の拡充を通じて、学内カリキュラムの改善、教授法や成績評価方法の再検討を試みている。

2011年度に国際センターが実施・協力した、FD支援費による活動をはじめ、その他の学内教育研究支援費および外部資金による国際的連携のための英語による講義・公開講座（表1）の具体的な活動を以下に報告する。

（表1）

国際的連携のための英語による講義・公開講座				
所属	講師名	開催日	タイトル	人数
欧州議会(ブリュッセル)	エンリコ・ダンプロジョ	2011/6/9	「EUにおける多言語使用と欧州議会の役割」	20
メルボルン大学(オーストラリア)	ラルフ・ベツマン	2011/6/10	“How do analysts and policy-makers talk about world affairs and why?”	25
インベストメント・バンカー	伊藤 澄子	2011/7/8	「オバマの母親:アメリカにおける女性の地位の問題」	22
国際関係学科・学外研究者	オムニバス形式	後期	“Japanese Studies in English: Political Economy”	6
国際関係学科・学外研究者	オムニバス形式	後期	“Japanese Studies in English: Literature, Culture and Society”	21
アペリストウイス大学(英国)	ジョナサン・リチャード	2011/9/30	“Contemporary Wales: Language, Culture, Politics and Change”	16
マンチェスター大学(英国)	モナ・ベイカー	2011/10/28	“Translation as an Alternative Space for Political Action”	120
神田外語大学	アンドリュー・亀井ダイチ	2011/11/18	“It's All Connections! -Natsume Soseki, Iwanami Shigeo, and Intellectual Life in the Late Meiji Period-”	10
ブレイキング工科大学(スウェーデン)	サラ・エリクセン	2011/11/16-18 2011/11/19	Lectures on Media Workshop, Health Informatics, Life Log, and Information systems 公開講座 “Introducing E-Applications for Non-Information Systems Majors”	5-10 10
慶應ジャンモネ研究員	小澤 藍	2011/12/23	“My Experience in Africa”	6
EUI(イタリア)	エレナ・ジャンキッチ	2012/1/28-1/31 2012/1/29	「EU特別講義a」「EU特別研究a」“The EU enlargement: dynamics, experiences, perspectives” 国際ワークショップ “The Eastern Enlargement of the EU and the Balkans”	8 9
EUI(イタリア)	ジョゼッペ・テレスカ	2012/2/1-2/4 2012/2/4	「EU特別講義b」「EU特別研究b」“The Economic History of the EU” 国際ワークショップ “Euro and Italian Economy”	7 20
ブリティッシュ・カウンシル	ジョン・グラント	2012/2/23	英語による講義・発表研修プログラム「講義とプレゼンテーション」	6

(1) 海外からの招へい教員による講義の充実と研究者交流【資料1～3】

1) マンチェスター大学（英国）モナ・ベイカー教授の招へいと公開講座・研究者交流

津田塾大学の翻訳コースのカリキュラムを補い、欧州における多言語状況のもとでの英語によるナラティブ(Narrative)研究の最前線を紹介する講義を通じて、学生・院生に刺激を与えただけでなく、学外の研究者交流を通じてネットワークを拡大した。

2) ブレイキング工科大学（スウェーデン）サラ・エリクセン教授の講義・研究者交流

交換留学協定校のブレイキング工科大学からサラ・エリクセン教授が来日し、情報科学の教育・研究の一助としての講義と公開講座（計5コマ）を行った。学生・院生に刺激になり研究者交流も進んだ。

3) EUI（イタリア）からの招へい教員による集中講義

EUSI東京の活動として、EUIから2名の講師を招聘し、各15回（2単位）の集中講義を行った。シラバス作成、事前の教材準備、インタラクティブな講義とフォローアップ、成績評価等、欧州標準を学ぶ機会として、教員や大学としても貴重な機会である。

(2) 教員向け英語による講義とプレゼンテーション・スキルの向上【資料4】

ブリティッシュ・カウンシルから講師を招き、教員の英語で行う講義・国際会議での発表等に対応するためのスキル向上のための集中講義を行った。英語力の向上、講義設計の参考およびプレゼンテーション・スキルを向上させる貴重な機会となった。今後も、教員向けの英語での指導力とスキル向上のための講座（ゼミとディスカッション・グループ、少人数クラスのレクチャーやアカデミック・ライティング等）を準備していく予定である。

(3) 英語による日本研究講義の充実【資料5】

本学教員および外部研究者のオムニバス形式での英語による日本研究 “**Japanese Studies in English: Political Economy**”（2単位）“**Japanese Studies in English: Literature, Culture and Society**”（2単位）を2011年度後期の実験的な講座として開設した。目的は、留学生のための日本研究カリキュラムの充実、日本人学生・院生の英語で日本について発信する能力の育成、本学教員の英語による講義の拡充である。

(4) サテライト講義の実施

EUSI 東京の事業活動として、2010年度、韓国延世大学・慶応義塾大学・津田塾大学を結ぶサテライト講義を実施し、双方向での質疑を行った。2011年度、EUI（イタリア）からの招へい教員と研究者による国際ワークショップ（2012年1月29日、2月4日）において、千駄ヶ谷キャンパスでの国際ワークショップに、小平キャンパスで集中講義を履修・聴講する学生が参加する実験を行った。EUSI サテライト講義の実験講義として、TV会議システムを利用した双方向コミュニケーションを行い、成果をあげた。

(5) その他—シンポジウム「途上国とつながる：女性起業家に学ぶ」の実施【資料6】

新興途上国の最貧困層の可能性を顕在化させようとしている5名の現代日本人女性パネリストの発表と本学の学生6名との間で行う討議を本学千駄ヶ谷キャンパスで行った。教員による国際協力教育を、現場の側から補うことで教員の開発教育のスキルと考え方を発展させる重要な機会となった。学生と教員の共同作業として行った点においても国際協力教育における試みとして評価できる。

土曜日の午前9時開始の企画にもかかわらず、午後の特別企画「祖国と故郷のはざままで — 姜尚中×崔善愛 対話と音楽」の波及効果もあり、学内外から約70名（現役在学生、OG、他大学生、社会人）の参加があった。

II 成果と評価

欧州を中心に急速に進む大学・大学院教育の改編に対応するため、FD支援費による「国際的連携のための英語による講義強化プロジェクト」、教育重点配分予算による「英語による日本研究」およびEUSI東京コンソーシアムの学術・教育活動において試行している事例等を紹介した。

この種の先駆的活動は、いわゆる費用対効果に直ちに対応しない場合も多いが、国際交流の地道な作業抜きに、ある日突然に、国際化対応のカリキュラムや教員の講義スキル、成績評価システムの改定などを行うことは、到底不可能であることはいうまでもない。

国際的な教育研究活動の充実は、従来の国内的な観点によるFDから、より柔軟で多様な、また同時に教育の質を問う国際的教育水準の達成にむけて努力をするうえで、ますます重要になってきている。

今後は、このような国際交流事業と連関する講義の単位互換やサテライトの実施など、3女子大学間での協力を進める必要がある。

【資料】

1. "Translation as an Alternative Space for Political Action" (モナ・ベイカー教授) 講義資料
2. ブレーキング工科大学 (スウェーデン) サラ・エリクセン教授 日本滞在レポート
3. エレナ・ジャンキッチ研究員 (EUI (イタリア)) : 日本滞在レポート・集中講義スケジュールとシラバス・International Workshop (2012年1月29日) Web 掲載情報、ジョゼッペ・テレスカ研究員 (EUI (イタリア)) : 日本滞在レポート・集中講義スケジュールとシラバス・International Workshop (2012年2月4日) Web 掲載情報
4. 英語による講義・発表研修プログラム「講義とプレゼンテーション」案内チラシ、コース・アウトライン
5. "Japanese Studies in English: Political Economy", "Japanese Studies in English: Literature, Culture and Society"シラバス
6. シンポジウム「途上国とつながる：女性起業家に学ぶ」プログラム

3.3 Contesting and Contested Narratives



言語にはその文化の価値観や世界観が埋め込まれています。英語は、メディアだけではなく文化やその他の側面において、英語の価値観が私たちの世界観構築に多大な影響を与えています。本日の講演は、とくに英語が *Lingua Franca* としていかに世界のナラティブを構築し、様々な現実をつくりあげているか、そこにいかに英語の価値観や世界観が反映されているかについてお話しいたします。



本日は、5つの観点から話します。

まずは文化界（詩、演劇、文学など）における英語の使われ方を見てみましょう。英語の影響は少ない分野と思われるかもしれませんが、文化や芸術は、私たちの身近にあります。文化や芸術を学校で習うことで考え方が構築されていきますので、実は私たちの世界観の構築に大きな影響力を持っているのです。


二つ目は大学です。大学界と文化、政界が協業し、ある特定の概念や考え方を広めようとしていることに言及します。

三つ目は主流メディアです。すでにご存知のとおり、メディアや広告は翻訳のありなしに関わらず、英語の影響を受けており、特定の考え方を広める役割を果たしています。文学のように英語が起点言語（*Source Language*）である場合は別ですが、メディアのナラティブの場合、英語はどちらであっても同じような影響力を及ぼすことに着目します。

四つ目はロビーグループです。ロビーグループとはメディアや政界に影響力を持ち、強力なパワーを持っています。特に MEMRI（中東報道研究機関）はアラビア語やペルシア語

から英語に翻訳を行い、MEMRI の翻訳 (=英語) を通して、特定の中東に関するニュースが世界へと伝わっていきます。New York Times や CNN、BBC は自社社員だけでは通訳・翻訳が追いつかないため、MEMRI のような機関の翻訳を使いニュースを流します。こうして、主流メディアの英語を通じて様々なナラティブが世界中に広がっていく例を紹介します。

5 つ目は通訳家活動家グループです。彼らの英語に対する立場は上記とは異なります。英語は支配的な言語であり、様々な現実を正当化するために使われているという立場をとり、英語を弱体化するため、英語以外の言語が発言できるスペースを通訳・翻訳を通して提供しているのです。こうして通訳家の個人やグループが、強大な影響力を及ぼす英語に対して闘っている例を紹介します。



Narrative

- A story, unfolding in time, with a (perceived) beginning and a (projected) end
- Constructed by numerous agents
- Populated by participants, real or imaginary, human or non-human, in a configured relationship to each other and to the unfolding story
- Realized in various media and by disparate means of expression

今までナラティブという言葉を使ってきましたが、改めてナラティブとは何か説明します。私たちは通常、現実を作り上げるストーリーを通してしか現実に触れることができず、直接的に現実を知ることはできません。ストーリーとは、私たちがメディアを通して、文学を読んで、他人との会話の中から形成されていきます。私たちが見聞きするストーリー、他人に伝えるストーリー、自分に言い聞かせるストーリー、これらを通して世界と繋がり、人間はこうしたストーリーに基づいて行動をとります。

英語は、この現実が語られる際に、最もよく使われる言語となっています。私たちの考え方や行動は、英語を通して語られる現実に基づいているのです。

Lingua Franca とされる言語がどれだけ支配的なパワーを持つかを理解するためにもナラティブは大変重要な概念です。ナラティブとは、以上のような論理フレームワークでは、ストーリーですが、時間が経つにつれて広まり、想定された始まりと予測された終わりがあります。私たちにとって現実とは始まりも終わりも明確ではありません。現実とは、小さなストーリーのストリーミングのようなもので常に続いています。ひとつの出来事を包括的なものとして話すためには、想定された始まりをつくりませんが、ナラティブは実際に終わることはないので、どこかで終わりを予測しなければなりません。

メディアのニュースは、あるナラティブの始まりを作り、どのように終わらせるのかを自分たちで考えたものです。これに基づいて私たちは現実を理解しているのです。

また、ナラティブはたくさんの関係者から成り立っています。自分が話すナラティブも

自分ひとりの見解ではなく、他人との議論やニュースに基づいてできています。

翻訳に携わる者として、この点は非常に重要です。よく翻訳の間違いの指摘や翻訳のされ方を指摘する人がいますが、翻訳とは翻訳者一人ではなく、編集者や出版社など多くのアクターが関わってできているものです。つまり、ナレーターは翻訳者一人ではなく、必ず複数のナレーターが関わって構築されているのです。

そして、ナラティブは、ひとつではなく、かならず複数のストーリーから成り立ち、競合し合っています。例えば、地球温暖化を取り巻く議論はたくさんあり、主人公もたくさんいます。人間とオゾン層がこれに該当します。これらが相互に関係しあい、ナラティブを形成するのです。

最後に、ナラティブは様々な形態を持っています。翻訳界では、従来からテキストのみに着目し、分析していました。ナラティブ理論は、テキストだけが重要なのではなく、その他にもテキストの解釈に影響を与える要素がたくさんあることを指摘しています。例えばウェブサイトでは、テキストだけを見るのではなく、ウェブサイトにある画像や色、時にはオーディオなど、すべてを取り込んで私たちは通訳・翻訳をします。よって、言語だけを見るのではなく、その上位にあるナラティブを含めて考えないといけないのです。



ナラティブが重要なのは、私たちの行動の決定に大きな影響を与えるからです。

英語が *Lingua Franca* として支配的なパワーを持っているのは、私たちの行動を決定するときに英語で語られるナラティブを判断基準としているところです。

例えば、1997年の香港返還ですが、英語では「主権移譲」といわれます。これは英国政府の見解を反映しています。香港はイギリスのもので主権を持っていましたが、英国政府の親切さゆえに主権を香港に移譲したという考えに基づいています。他方で「香港返還」をみると、もともと香港は中国に属し、それが返還されたということがよく分かります。「主権移譲」と「母国へ返還」は全く意味が異なります。私たちがどちらの言葉を使うか選択することにより、ナラティブを広めることに貢献しているのです。しかし、私たちはメディアで聞いている言葉を何も考えずに使ってしまうがちです。つまり英語を使う国々の価値観が、英語という言葉を通じて世界に広まり、それに基づいて私たちは考えを構築しているのです。だから英語は大きなパワーを持っているのです。

一番下にあるのは、1956年当時エジプトナセル大統領がスエズ運河を国有化した事件の

ことですが、英語をはじめ多くの国では「スエズ危機」と呼ばれています。私たちが想起するのは、政治的危機をどうにか解決しようと翻弄する政治家の姿ですが、アラビア語では「3国による攻撃」と表現されます。イスラエル・フランス・イギリスがエジプトに攻撃をした、という呼び方がアラビア語ではデフォルトとなっています。英語ではこのように呼ばれることはありませんし、英語のニュースを土台にしている他国でもアラビア語の見解を受け入れている国は非常に少ないです。アラビア語では「攻撃」という言葉を使うので、「政治的な危機」というナラティブではなく、実際に人が死んでいるというナラティブを伝えています。

英語で表されたナラティブに基づいて翻訳がされ、その翻訳に含まれた英語の価値観を取り込むことで、英語は私たちの考えに大きな影響を持つことになるのです。



文化界についていえば、英語は大概起点言語となりますが、英語が目標言語である場合にも大きな影響を及ぼします。これはあるエジプト人女性作家が20世紀前半の時代における女性の権利に関して書いた本の例です。彼女は、女性権利の活動家のパイオニアであり、女性の参政権について主張していました。この本は彼女伝記であり、1986年にアメリカ人女性の中東専門家により翻訳されました。タイトルの翻訳からして、原作が欧米に存在する中東に対する価値観に合うように変えられたことが如実に分かります。例えば、「ハリーム（女性たち）」という言葉は、英語では「娼婦」という意味で使われており、欧米の中東に対する偏見を表しています。タイトルには「フェミニスト」という言葉が使われていますが、当時のフェミニストは今で言うフェミニズムとは違い、大きな影響力がなかったうえ、作者自身も自分のことをフェミニストと思っていたかも定かではありません。翻訳を通じて、作者が必ずしも同意しない特定のナラティブが作られ、広められています。ナラティブを作るのは、翻訳のテキストだけではありません。この本の翻訳では文章の内容も変えられ、さらにイントロでは作者が「ハリーム」という言葉を多用し、閉ざされた中東の女性というナラティブを強く表しました。これは原作者の言いたいことではなかったと思います。

英語に翻訳するということは、原文の言語が周縁化され、ときには原文や起点文化のナラティブさえも変えられたものが世界に広められることになるのです。

The University of Manchester
MANCHESTER 1921
Cultural Industry: Resistance
Speak White, Michèle Lalonde (1968)

speak white
tell us that God is a great big shot
and that we're paid to trust him
speak white
parlez-nous production profits et pourcentages
speak white
c'est une langue riche
pour acheter
mais pour se vendre
mais pour se vendre à perte d'âme
mais pour se vendre

同時に文化界は、支配的なナラティブに抵抗することもできます。例としてケベックの詩を紹介します。ケベックの人々はフランス語を喋り、カナダからの独立を求めています。英語は、彼らにとっては支配的な言語・植民地の言語であり、長い間抵抗を続けてきました。この詩はフランス語がベースですが、英語のパワーを示すために意図的に英語を使っています。

The University of Manchester
MANCHESTER 1921
Speak White
Translation by D. G. Jones (1970)

tell us that God is a great big shot
and that we're paid to trust him
speak white
speak to us of production, profits and
percentages
speak white
it's a rich language
for buying
but for selling oneself
but for selling one's soul
but for selling oneself

タイトルは「Speak White」、白人と黒人、つまり支配者と被支配者の関係をイギリス系カナダ人とケベックのフランス系カナダ人に対比して表しています。この詩が英語に翻訳されたとき、もともと英語の部分は太字として強調されました。英語は企業文化をもたらした言語、経済的な力で人々を抑圧した言語として描かれています。この詩が英語に訳された重要な理由は、英語に対して抵抗していることを、英語を話す人たちに知ってもらうことにあります。また英語にすることで、世界中で読んでもらえることができるようになります。

この例では、権力の逆説が見て取れます。巨大な権力に立ち向かうためには、沈黙や無視、仲間内だけで抵抗を続けるのではなく、権力、この場合英語を利用して抵抗しなければなりません。もちろん、英語を使うことで英語のパワーを増強させるかもしれませんが、抵抗の言語としても英語を使うことができるのです。



Speak White Michèle Lalonde (1968)

Speak white
tell us again about Freedom and Democracy
nous savons que liberté est un mot noir
comme la misère est nègre
et comme le sang se mêle à la poussière des
rues d'Alger ou de Little Rock



Speak White Translation by D. G. Jones (1970)

Speak white
tell us again about freedom and democracy
We know that liberty is a Black word
as misery is Black
as blood is muddied with the dust of
Algiers or of Little Rock

もう一例あります。この例では、英語は経済力の象徴としての言語ではなく、暴力の象徴として描かれています。

英語へ翻訳をする・しないに関わらず、文化界では英語の支配的地位を強めることもできますが、同時に抵抗の言説ともなりえるのです。



The Academy, English as Dominant SL & the 'Civilizing Mission'



次に、学术界でいかに翻訳を通じて英語の価値観が高められ広められているかについてお話しします。例として Global Americana というプロジェクトを紹介します。

このプロジェクトはミシガン大学で行われたもので、MEMRI のような政治的な意図のものではなく、中東の専門家が善意から中東の人のために声を上げ、イラク侵攻に反対を表明する人たちが立ち上げました。しかし、彼らのアラブ界に対する世界観は、欧米が中東に対して持っている概念のひとつ、中東を文明化させる「宣教」の概念に基づいていました。つまり民主主義を輸出して中東に宣教するというものです。

Global Americana 1

- The classics of American thought and history have been little translated into Arabic. We have therefore begun a project to translate important books by great Americans and about America into Arabic, and to subsidize their publication so that they can be bought inexpensively.

....

これはアメリカの偉人たちの本を翻訳して輸出する翻訳プロジェクトでした。まず前提として、中東はアメリカから学び、そうすれば中東は今よりもよくなるという発想があり、民主主義や多文化主義に関する本を翻訳して出版しました。つまり、軍隊を送るわけではないですが、翻訳や英語を利用してアメリカの思想を「野蛮な」中東の人々に教え、アメリカの価値観を植え付けようとしたのです。

よって、大学も文化界や政界と並んで、英語の価値観を広め、英語の支配的な地位を高めるひとつの要素として役割を果たしているのです。

Mediating Narratives of Global Conflict in Mainstream Media

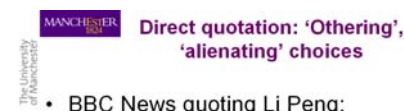
- Gatekeeping and newsworthiness: concentration of means of gathering and disseminating news
- Invisible translations
- Direct quotation (authenticity)

次は大手メディアについてです。大手メディアや広告業界がいかに関世界観や価値観を広めるのに大きな役割を果たしているかは自明です。メディアと英語の関係を考える上で3つのことに気をつけなければなりません。1つはニュースの価値を決めるというゲートキーピングの役割です。新聞紙やTV局は世界中に特派員を派遣できるほどリソースが豊富ではありません。よって特派員を世界中に送っている通信社と呼ばれるメディアの巨人が、英語を元にニュースを発信しており、他国のメディア局は通信社の題材を元にニュースを伝えます。この通信社が、ニュースになる・ならないかを決めるのでゲートキーピングの役割を果たしているのです。

しかし特派員は、英語で取材をしません。現地の言葉で会話をするため、ニュースになるまでの過程では、多くの翻訳・通訳が必要となります。しかし、翻訳・通訳は完全に見えないものとされ、全てのニュースはあたかも英語で行われていたかのように報道されます。しかし通信社が言語的仲介に深く関わっていることは、インタビューの直接引用を見るとすぐに分かります。



直接引用は、ニュースの真正性を証明するために重要な要素ではありますが、この直接引用の翻訳を見ると、編集者の意図や誤訳が浮き彫りになります。最初の例は、1989年天安門事件の報道です。天安門事件とは学生が天安門広場に集まり抗議をしていたところ、当局が攻撃し学生を虐殺しました。2001年、ハーバード大学の政治学者たちのもとに、天安門事件発生当時、中国当局で働いていた関係者が、政府が行っていた議論を録音したテープを公表するよう懇願しました。この録音には、政府が意図的に虐殺事件を企てていたことが記録されていました。



- “The spear is now pointed directly at you and the others of the elder generation of proletarian revolutionaries”

政治学者たちはこのテープを英語に翻訳し、出版し、その数年後、中国語でも出版されました。当時、BBCは中国政府の無慈悲さを表すために、このテープを引用しました。

しかし、直訳をしたため非常に不自然な英語でした。しかし、これは中国の官僚たちは世界から隔離され、彼らにしか分からない言葉で話し、さらにマルクス主義を思わせるような心象を視聴者に与えるために、意図的に直訳をしたのです。

ニュースで使用されるインタビューが英語に翻訳されるとき、話をしている人の人間性が奪われ、信頼性を欠くものとされてしまうこともあるのです。



- Ahmadinjad – CNN live translation of press conference, 2006
- Nuclear weapons (vs. nuclear technology): “we believe all nations are allowed to have nuclear weapons”, the west “should not deprive us to have nuclear weapons”.

直接引用は、ニュースでも重要な役割を持っていますが、時には翻訳された一言が一人

歩きしてしまうこともあります。これは 2006 年 CNN のものです。イランが核開発を進めている疑惑がありイランに対する制裁を課すこと議論していたときのアフマディネジャド大統領の会見です。この会見は同時通訳が付きましたが、大統領が「核エネルギー」と言っていたのを通訳者は「核兵器」と訳していたのです。CNN の通訳者が「意図的に」誤訳をしたとされ、イランから 1 ヶ月出入り禁止となりました。しかし世界のメディアは CNN を元に報道をしています。後に CNN がイランに対して正式謝罪をしようとしたころ、アフマディネジャド大統領はすでに核兵器開発をしていると世界中で考えられたのです。

 **Inflammatory translations**
Media Sound Bites

- Ahmadijad (AP, New York Times, BBC, etc.) – 'Israel Must Be Wiped Off the Map'
- See: 'Wiped off the Map: Rumour of the Century', Arash Norouzi
- Jonathan Steele, *Lost in Translation*, *The Guardian*, 14 June 2006

もうひとつ、アフマディネジャド大統領がイランの民衆に向けた会見で、過去の抑圧的な政権は必ず民衆によって転覆されると言い、例としてイスラエル政府を挙げました。そこで「イスラエルを地図上から抹消する」と言ったと報道がされました。しかし実際は「歴史のページから抹消する」、つまり歴史の暗い 1 ページでありもう繰り返さないようにと言ったのです。この件も誤訳の謝罪をしましたが、メディア界ではニュースは非常に早く伝わるので、謝罪するころには時すでに遅し、意味をもちません。

 **Lobby Groups**

- MEMRI (Middle East Media Research Institute)
- Palestinian Media Watch
- Middle East Strategic Information

ロビーの例を紹介しますと、これも中東からの例となります。パレスチナ-イスラエル紛争に関しては、多くの機関が翻訳に頼らざるを得ない環境にあります。MEMRI はアラビア語から主に英語へと翻訳をし、世界中に発信します。政治家は MEMRI を信用し、重要な決断をする際は MEMRI の翻訳家を呼ぶこともあるそうです。NYT、CNN も MEMRI の翻訳を信用し、報道します。MEMRI の HP には、翻訳はナラティブを世界へと広める強力なツールであることを認識しています。

Mickey Mouse Video

- MEMRI video clip No. 1442, attached to Special Dispatch Series No 1577 and entitled 'Hamas Al-Aqsa TV: A Mickey Mouse Character Teaches Children About the Islamic Rule of the World And to 'Annihilate the Jews''. Posted on MEMRI website on 9 May 2007 but no longer available.
- Excerpts from *The Pioneers of Tomorrow*, a children's programme aired on Hamas's Al Aqsa TV on 6-13 April 2007

MEMRI が紛争の翻訳に意図的に介入し、ナラティブを作り上げる例を紹介します。MEMRIは文書だけではなく動画メディアも翻訳します。これは2007年に発表され、YouTubeにのったパレスチナのガザで放送されている *Pioneers of Tomorrow* という子供向けの番組です。私自身も視聴しましたが、明らかに意図的な誤訳があっただけではなく映像にも操作された形跡がありました。しかし、これは世界中の新聞各社に送られ報道されたのです。目的は、パレスチナ人は凶暴であり、子どもたちを洗脳していることを伝えるためでした。

MEMRI Translation

- Host Saraa, a young girl: "Sanabel, what will you do for the sake of the Al-Aqsa Mosque? How will you sacrifice your soul for the sake of Al-Aqsa? What will you do?"
- Sanabel, young girl on phone: "I will shoot." [*I'm going to draw a picture.*]
- Farfour, a Mickey Mouse character in a tuxedo: "Sanabel, what should we do if we want to liberate..."
- Sanabel: "We want to fight." [*We want to resist.*]
- Farfour: "We got that. What else?"
- Saraa: "We want to..."
- Sanabel: "We will annihilate the Jews." [*The Jews are shooting us.*]
- Saraa: "We are defending Al-Aqsa with our souls and our blood, aren't we, Sanabel?"
- Sanabel: "I will commit martyrdom." [*I will become a martyr.*]

下に赤字で誤訳を訂正しました。「Draw a picture (絵を描く)」を「Shoot (撃つ)」と訳し、「Resist (抵抗する)」を「Fight (闘う)」と訳していたり、女の子が「The Jews are shooting at us (ユダヤ人が攻撃してくる)」と言っているのを「We want to annihilate the Jews (ユダヤ人を抹殺したい)」と訳しています。また「I will become a Martyr (殉死してしまう)」を「Commit Martyrdom (殉死をする)」と訳し、あたかも殉教するような攻撃を積極的に行うことを連想させるような訳し方をしています。いまだにパレスチナ人の反ユダヤ主義を表象する際にこの映像はニュースで取り扱われます。

以上がメディアになります。主流メディアは英語を通じて支配的になり、英語の支配的地位を高め、英語に翻訳される題材によって私たちの世界観を脚色するのです。



これに抵抗する通訳・翻訳者の活動グループがあります。Babels というグループは英語の支配的な力に警鐘を鳴らし続けてきました。Babels は英語を支配的な地位から下げることがを主張しており、彼らの Web ページで表記される言語は、必ずしも英語が一番上になく、3番手にあり、設立目的の欄には英語は植民地主義の言語であると見解を明確に示しています。

Conclusions

- We construct the world by narrating it to ourselves and others
- Narrating the world in English today is more effective than narrating it in other languages
- Mainstream media and lobby groups make particularly questionable use of the power of English to perpetuate conflict
- Challenging the dominance of English often takes the form of both using it as a channel of communication and resisting it
- The power of English is challenged by
 - (a) using it 'irreverently'
 - (b) empowering other languages/supporting linguistic diversity
 - (c) contaminating English through translations from other languages

私たちの社会はテキストという部分的なものではなく、ナラティブという概念から成り立っており、言語・非言語的題材を通じて広まっています。

またナラティブは複数のアクターにより構築され、常に競合し合っています。ひとつの事象にひとつだけのナラティブがあるのではなく、必ず複数のナラティブから成り立っているのです。また英語が世界中にナラティブを広めるのに大きな役割を果たし、ある文化のナラティブが英語により変化し、それが世界を旅してその国に逆輸入されることで、自文化への認識が変えられてしまうこともあることを話しました。Edward Said は権力とは絶対的ではない、必ず競合することができるし抵抗もできると述べました。英語は現代では支配的な権力を持っていますが、抵抗をすることはできます。英語は世界中で話され、様々な世界英語が出てきています。これも古典的な英語に対する抵抗と考えられます。権力に抵抗するには、確かに権力を利用しなければなりません。そこで権力を増強する可能性はありますが、同時に権力のあり方を変えることもできるのです。権力側の意見や見解とは異なる見解を述べるときに英語を使うことで、実は権力を弱体化させることもでき、抵抗の最初の切り口となるのです。

ご静聴、ありがとうございました。

■ 2011 年度翻訳コース 履修学生 ■

齋藤真帆	安藤真奈美	古市玲奈
橋本麻美	* 野村香苗	小倉咲
鈴木充美	* 大野彰子	* 橘智子
* 月岡悠紀	今村彩織	松田恵美香
西松裕美	房尾和枝	猪瀬友美
川崎恵子	佐藤有香	

* ...編集委員

■ ご協力 ■

表紙...姫野雅美 岡野愛子
講演会録...岸本麻里花 金蔵杏子 堀口陽子 松下希和

■ ご指導 ■

早川敦子教授

ありがとうございました。

Travel report from a visit to Tsuda College, Tokyo, Japan in November 2011 within the Bilateral Teacher Mobility program

by Sara Eriksén, Blekinge Institute of Technology, Sweden

In November 2011 I spent a week in Japan. Within the framework of the *Bilateral Teacher Mobility program*, I visited and gave 6 lectures at Tsuda College, a women's college in Tokyo with which Blekinge Institute of Technology has a student and staff exchange agreement. Tsuda College has a heritage to be proud of; they have been empowering women since 1900. The story of how the college was started is amazing and inspiring;



*“In 1871, Umeko Tsuda, then six years old, was one of five young women selected by the Hokkaido Colonization Board for their overseas study program. After living for 11 years in a suburb of Washington, D.C., she returned to Japan in 1882 at the age of 17. Upon her return, she experienced a severe case of culture shock. She was particularly alarmed at Japanese society's prejudice against women and quickly decided that something must be done to improve the social status of women. She became determined to provide Japanese women with the opportunity to obtain higher education”.*¹

Umeko Tsuda returned to the United States and studied at Bryn Mawr College 1889-1892, majoring in biology and education. She also studied at St Hilda's College in Oxford, UK. In 1900 she founded the Women's Institute for English Studies, which later became Tsuda College. Knowing how difficult it can be for exchange students, even today, to spend a year far away from home in a different culture, learning to master a new language, imagine leaving home at the age of six and not coming home again for more than 10 years! Tsuda College is an impressive accomplishment, founded by a person who must have been one of the youngest exchange students in history. What might not our exchange students accomplish in the future?



I had the privilege of staying at the Guest House at the Tsuda College campus in Kodaira, in western Tokyo. This was a beautiful old two-story house on the edge of the leafy green campus. The Guest House provided me with an elegantly furnished, quiet and very comfortable living and working space during my stay. The campus is very welcoming. Besides the impressive main building, which faces the entrance gate (see picture at left), there are a number of modern, light and airy buildings on campus, witnessing beautiful Japanese architecture.

The library was designed by the world-famous architect Kenzo Tange, as was, I believe, another building near the entrance gate which I didn't have the opportunity to see from the inside, but which had a singular beauty about it, simple, but with angles and windows just-so, in utmost balance.

Tsuda College is a liberal arts college. However, they have a Department of Computer Science, the goal of which is *“to provide students with both a solid theoretical grounding in informatics and the necessary skills to pursue a high-level career in information technology.”*¹ Most of the lectures I gave during my stay at Tsuda College were in informatics, which is my main area of research and teaching expertise. The hosting teacher for these lectures, associate professor Akihisa (Aki) Kodate, is director of the Center for Women in Research and chair of the Computer Science Major, Graduate program of Mathematics and Computer Science at Tsuda College. He is currently doing research concerning ubiquitous information systems for health and welfare services, with a special focus on Information Quality aspects. He is also a senior researcher of the Institute of Information and Communication Policy (IICP) at the Ministry of

¹ Quoted from the Tsuda College website <http://www.tsuda.ac.jp/en>

Internal affairs and Communication of Japan. Aki Kodate will hopefully be visiting Blekinge Institute of Technology in June 2012, as he will be spending some time on sabbatical in Europe (Münich, Germany), around that time.

During my stay at Tsuda College, Aki Kodate kindly arranged a visit to NICT, the *National Institute of Information and Communications Technology*. At NICT they are doing research on, among other things, network security. I saw an impressive visualizing tool for worldwide network traffic which is apparently used to increase awareness of, map and protect Japan against possible cyberattacks. Optical networking, next generation internet and reliable wireless networks that can be depended on for environmental conservation as well as in extreme conditions such as disaster recovery, are other areas of research that NICT is working with, where I could see indications of on-going research that could be of interest for some of our research groups at Blekinge Institute of Technology.

The Bilateral teacher mobility program includes giving a number of lectures during one's exchange visit. I arrived in Tokyo on **November 15th**, in the morning, on a direct flight from Copenhagen which took roughly 10 hours. On that first day, I met with the Center for International Exchange (CIE) staff, went through my schedule for the week with them, and started preparing my lectures. During my stay, I gave the following lectures at Tsuda College:

Wednesday, Nov. 16th 8:50-10:20	Media workshop with undergraduate students, most of them non-IT major students. Presentation of on-going research in e-health and e-government that I am involved in (<i>Nurse Gudrun, IMMODI</i>)
13-14:30	Health Informatics , undergraduate, all IT major students.
Thursday, Nov. 17th 10:30-12	Life Log , graduate students, discussion of on-going research in e-health and about the attending students' master thesis projects
12:20-12:40	Presentation about Blekinge Institute of Technology , including greetings from and photos of and by the three students from Tsuda College who are currently exchange students at BTH. Undergraduates, during lunch break. (Actually lasted longer, with Q and A session)
Friday, Nov.18th 13-14:30	Information Systems . Undergraduate students. IT major only, last semester before graduation
Saturday, Nov. 19th 10:30-12	e-government in Sweden and the EU . Students and general public (non-IT major), at Sendagaya Campus in central Tokyo.

The final lecture was hosted by professor Takamoto Sugisaki, who is a member of the Executive Committee of EUSI (EU Studies Institute in Tokyo). EUSI is a center for academic education and research and outreach activities on the EU related issues in Japan. It is managed by a Consortium of three Tokyo universities, of which Tsuda College is one. The Tsuda Sendagaya Campus is very centrally located in Tokyo, just across the street from another famous building designed by Kenzo Tange, a seashell shaped gymnasium used for the 1964 Olympics.

Everyone I met during my visit to Tsuda College was very kind and helpful. The Center for International Exchange (CIE) took care of all the practical arrangements concerning my stay at the Kodaira Campus. Yumiko Ishimoto prepared everything for me, including excellent instructions about how to get from the airport to Tsuda College Kodaira Campus. I was a bit worried about this, as I have not yet learned to speak and read Japanese. Thanks to the thoughtful preparations by my hosts, it was never a problem. One evening, I was invited to a delicious Japanese dinner at the CIE office (see picture below). Another evening I visited a Japanese bathing house near the Tsuda College campus, which was a wonderfully relaxing experience.

During my stay, I had the privilege of meeting the President of Tsuda College, Masako Iino. When I told her that BTH has a female Vice Chancellor as well (which I am very proud of), she suggested with a smile that perhaps staff exchange could be arranged between BTH and Tsuda College on all levels. The President of Tsuda College must be a very busy person, but my lasting impression from this meeting was of calm, presence, warmth and humor. Empowering women, it would seem, is also about alternative ways of taking on, using and managing positions of power.

This visit was my first visit to Japan. I was impressed and inspired by Tsuda College and the people I met there. Staff and students alike were friendly, welcoming and interested to hear about Sweden, Blekinge Institute of Technology and our education programs and on-going research in applied IT, innovation and sustainable growth (especially e-health and e-government). I hope that more students, and also staff, from Tsuda College will find their way to Blekinge Institute of Technology in the future – and vice versa!

**Travel report from a visit to Tsuda College, Tokyo, Japan in January 2012
within the exchange program between the RSCAS at the European University Institute with
the Tsuda College and EUSI Tokyo
by Jelena Dzankic, EUI, Florence, Italy**

In January 2012 I spent about a week in Japan. Within the exchange program between the RSCAS at the European University Institute with the Tsuda College and EUSI Tokyo, I visited Tsuda College in Kodaira, Tokyo, whereby I taught an intensive course on the enlargement of the European Union (EU). In addition, I participated to an international workshop on the EU's eastern enlargement, which gathered Japan-based scholars dealing with the enlargement-related topics.

Staying at Tsuda College very much reminded me of my graduate study at New Hall College in Cambridge, which is also a college devoted to empowering and emancipating women. As an all-women's college, Tsuda has a tradition of over a century. Established in 1900 by Umeko Tsuda, this college was among the pioneers of women's education in Japan. Its establishment is also very much related to the experience and the intersection of different cultures, which contributes to the unique profile of this institution. In 1871, a six years old Umeko Tsuda was sent to the united States to attend an overseas study program. She returned to Japan a bit more than a decade later, only to realize the difference between the American and Japanese societies and cultures. Tsuda believed that the emancipation of women in Japan was essential and thus became resolute to provide Japanese women with the chance to attend an institution of higher education. And so is the story of Tsuda College, a place where the liberal arts education meets the Japanese cultural heritage.

During my stay in Tsuda College, I stayed at the beautiful Guest House. The second floor of the house was designed in a beautiful Japanese style, which offered me the possibility of a unique experience of this country's lifestyle. I was particularly fascinated by the living room at the Guest House, with the traditional Japanese katana floor, large shutters and simple indoor decorations. Coupled with modern amenities, the Guest House was a perfect environment which helped me to prepare my lectures. During my stay at Tsuda College, I delivered the course entitled 'The EU enlargement: dynamics, experiences, perspectives', which consisted of the following lectures:

Saturday, 28 January

10:30-12:00 1. Introduction to the course: the EU enlargements overview, issues, political dynamics

13:00-14:30 2. Structures and actors of the EU enlargement process

14:40-16:10 3. The first EU enlargement (1973)

16:20-17:50 4. The Mediterranean enlargement (1981, 1986)

Sunday, 29 January

10:30-12:00 5. EU enlargement after the fall of communism: a change in dynamics

Monday, 30 January

10:30-12:00 9. The 2004 enlargement of the EU: political dynamics

13:00-14:30 10. The 2004 enlargement of the EU: socio-economic issues

14:40-16:10 11. The 2007 enlargement of the EU

16:20-17:50 12. The EU after the Eastern enlargement

Tuesday, 31 January

10:30-12:00 13. Perspectives of EU enlargement: the Western Balkans

13:00-14:30 14. Current issues of the EU enlargement - Europeanness and identities

In addition to these lectures, Prof. Takamoto Sugisaki organized a workshop on Sunday, 29 January. The workshop took place at the Sendagaya campus of Tsuda College, which is located in central Tokyo, with satellite transmission to Kodaira campus, which enabled the students to take part in the discussion.

The topic of the workshop was 'The Eastern Enlargement of the EU and the Balkan', and the participants were able to discuss issues related to the future of the EU, as well as its experience with the 2004 enlargement. The workshop started with a presentation by the Deputy Head of Mission of the republic of Slovakia to Japan – Mr. Martin Podstavek - who gave a lecture on 'The Eastern Enlargement of the EU and Independence of countries', with a particular emphasis on the 'velvet divorce' between Slovakia and the Czech Republic. My presentation followed with a discussion on 'Citizenship in Montenegro and the EU', after which the Professor Emeritus at Niigata University – Prof. Yoji Koyama – offered a detailed overview of the relationships between the EU and the Western Balkans. The session's discussant – Dr. Eva Banicova – provided a series of interesting and challenging questions to be dealt with in the course of this academic interchange. The discussion was so stimulating for all of the participants that the chair – Prof. Ryosuke Amiya-Nakada – extended the session for about 40 minutes.

Certainly, none of this would have been possible had it not been for my wonderful hosts at Tsuda College's Center for International Exchange (CIE).

Ms. Akiko Kariatsumari took care of the logistical support before and after my arrival, which also included the necessary documents for obtaining a visa for my stay in Japan, as well as detailed arrival instructions. After my arrival at Tsuda College, a day ahead of the scheduled lectures, Ms. Kariatsumari and Ms. Yumiko Ishimoto greeted me and introduced me to college life. I very much appreciated their efforts in helping me to visit various sites during my short stay in Tokyo.



With the assistance of Tsuda College students and staff, I visited the area of Kichijoji, and the historical quarter of Asakusa which is home to a wonderful Japanese temple.

Thanks to them, I learned how to use public transportation in Tokyo, despite the fact that I spoke no Japanese or read any of the three alphabets used in this country, and visited the contemporary areas of Shinjuku and Shibuya. Hence, I enjoyed my stay in Japan a lot, and I hope to be able to repeat my visit to Tsuda College and the 'Land of the Rising Sun' at some point in the future.



INDEX

組織

- [紹介](#)
- [ごあいさつ](#)
- [組織図](#)

研究交流活動

- [研究活動](#)
- [講演、公開講座](#)
- [その他](#)

ライブラリー

- [概要](#)
- [アクセス](#)

LINK

- [リンク](#)

お問い合わせ先：EUSI 津田塾

〒187-8577
東京都小平市津田町2-1-1
津田塾大学 EUSI事務局分室
TEL&FAX: 042-342-5134
E-mail: eusi@tsuda.ac.jp



研究交流活動

写真提供：欧州委員会

[トップページ](#) > [研究交流活動](#) > [その他](#) > [集中講義](#)

集中講義「EU特別講義a」「EU特別研究a」

集中講義「EU特別講義a」「EU特別研究a」

“The EU enlargement: dynamics, experiences, perspectives”

Dr. Jelena Džankić

Jean Monnet Fellow, Robert Schuman Centre of Advanced Studies (RSCAS), European University Institute (EUI)

日付: 2012年1月28日(土)–31日(火)

場所: 津田塾大学 小平キャンパス

1/28(土)

- 10:30–12:00 1. Introduction to the course: the EU enlargements overview, issues, political dynamics
- 13:00–14:30 2. Structures and actors of the EU enlargement process
- 14:40–16:10 3. The first EU enlargement (1973)
- 16:20–17:50 4. The Mediterranean enlargement (1981, 1986)

1/29(日)

- 10:30–12:00 5. EU enlargement after the fall of communism: a change in dynamics
- 13:00–14:30 6. Workshop
- 14:40–16:10 7. Workshop
- 16:20–17:50 8. Workshop

1/30(月)




- 10:30–12:00 9. The 2004 enlargement of the EU: political dynamics
- 13:00–14:30 10. The 2004 enlargement of the EU: socio-economic issues
- 14:40–16:10 11. The 2007 enlargement of the EU
- 16:20–17:50 12. The EU after the Eastern enlargement

1/31(火)

- 10:30–12:00 13. Perspectives of EU enlargement: the Western Balkans
- 13:00–14:30 14. Current issues of the EU enlargement – Europeanness and identities
- 14:40–16:10 15. Final exam

➤ [シラバス\(詳細\)](#)

The EU enlargement: dynamics, experiences, perspectives

1. Introduction to the course: the EU enlargements overview, issues, political dynamics
 - a. This lecture introduces the course, its aims and objectives. It also presents an overview of the EU enlargements, and contextualises the following lectures. It looks at the rationale behind the development of the EU.
2. Structures and actors of the EU enlargement process
 - a. This lecture looks at the roles of the different EC/EU institutions in the enlargement process. In particular, the lecture will offer a historical perspective on the evolution of the roles of the European Commission and the European Parliament in the different enlargement rounds.
3. The first EU enlargement (1973)
 - a. The aim of this lecture is to look in detail in the first EC enlargement (the United Kingdom, Denmark, and Ireland). Issues covered will include both the presentation of the Community's internal response to new membership applications, and the overview of motives and rationales of the acceding members to join the EC.
4. The Mediterranean enlargement (1981, 1986)
 - a. The aim of this lecture is to look in detail in the second EC enlargement (Greece 1981, Spain and Portugal 1986). Issues covered will include both the presentation of the Community's internal response to new membership applications, and the overview of motives and rationales of the acceding members to join the EC. Particular attention will be paid to the transformation of post-authoritarian societies in view of EU enlargement.
5. EU enlargement after the fall of communism: a change in dynamics
 - a. This lecture looks at the change in the dynamics of enlargement after the fall of communism. It looks at the 'hidden enlargement' (unification of Germany), and the simultaneous transformation of the EC into the EU. The lecture pays particular attention to the rationale behind the introduction of the conditions of membership, which were subsequently applied to Central and East European States.
6. 
7.  Workshop
8. 
9. The 2004 enlargement of the EU: political dynamics
 - a. This lecture will examine in detail the political dynamics of the 2004 enlargement round. Issues covered will include both the presentation of the Community's internal response to new membership applications, and the overview of motives and rationales of the acceding members to join the EC. Particular attention will be paid to the transformation of post-communist societies in view of EU enlargement, and

political problems encountered in the process of adapting to the conditions of membership, such as the rule of law and minority rights.

10. The 2004 enlargement of the EU: socio-economic issues

- a. This lecture will examine in detail the socio-economic issues pertaining to the 2004 enlargement round. Particular attention will be paid to the transition from central to free market economy, and socio-economic problems encountered in the process of adapting to the conditions of membership, such as high inflation rates, unemployment, non-transparent privatisation, corruption and nepotism.

11. The 2007 enlargement of the EU

- a. This lecture will examine in detail the (late) accession of Bulgaria and Romania to the European Union. The lecture will explore why these two countries were laggards in the enlargement process, and what were the economic and political costs of their accession to the EU.

12. The EU after the Eastern enlargement

- a. This lecture will explore the change of EU's internal dynamics after the Eastern enlargement, and pay particular attention to the 'enlargement fatigue' in the context of the financial crisis.

13. Perspectives of EU enlargement: the Western Balkans

- a. This lecture will look at the EU's policy towards the Western Balkans. Particular attention will be paid to EU's stance towards post-conflict societies, as well as to the change of EU's conditionality after the 2003 Thessalonica Agenda.

14. Current issues of the EU enlargement – Europeanness and identities

- a. This lecture will look at the broader, societal and sociological, issues related to EU enlargement, ideas about European identity and European citizenship. The lecture will also make an emphasis on the questions of European identity and the candidacies of Turkey and Iceland.

15. Final exam

INDEX

組織

- > [紹介](#)
- > [ごあいさつ](#)
- > [組織図](#)

研究交流活動

- > [研究活動](#)
- > [講演、公開講座](#)
- > [その他](#)

ライブラリー

- > [概要](#)
- > [アクセス](#)

LINK

- > [リンク](#)

お問い合わせ先：EUSI 津田塾

〒187-8577
東京都小平市津田町2-1-1
津田塾大学 EUSI事務局分室
TEL&FAX: 042-342-5134
E-mail: eusi@tsuda.ac.jp



研究交流活動

写真提供：欧州委員会

[トップページ](#) > [研究交流活動](#) > [研究活動](#) > **EUSI津田 International Workshop**

EUSI津田 International Workshop

EUSI津田 International Workshop

“The Eastern Enlargement of the EU and the Balkans”

セッション1 講演

“The Eastern Enlargement of the EU and Independence of countries”

ドゥラホミール・シュトス
駐日スロバキア共和国特命全権大使



“Citizenship in Montenegro and the EU”

エレナ・ジャンキッチ
EUI ロベール・シューマン・センター ジャン・モネ研究員



“The Eastward Enlargement of the EU and the Western Balkans”

小山洋司
新潟大学 名誉教授



セッション2 ディスカッション

Chair 網谷 龍介 (津田塾大学 教授)

ドゥラホミール・シュトス (駐日スロバキア共和国特命全権大使)

小山洋司 (新潟大学 名誉教授)

エレナ・ジャンキッチ (EUI ロベール・シューマン・センター ジャン・モネ研究員)

パニンコバ・エバ (EUIJ関西、神戸大学 准教授)

日時: 2012年1月29日(日) 13:00-17:00

場所: 津田塾大学 千駄ヶ谷キャンパス 別館1F A101

言語: 英語

参加費: 無料 (申込要)

申し込み・問い合わせ先: EUSI津田分室

E-mail eusi@tsuda.ac.jp TEL 042-342-5134

EUSI (EU Studies Institute) 東京

津田塾大学 千駄ヶ谷教育研究機構プロジェクト

Copyright (C) EUSI TSUDA.

Travel report from a visit to Tsuda College, Tokyo (Japan)

1-4, February 2011

Giuseppe Telesca, Jean Monnet Fellow, European University Institute, Fiesole, Italy

Between the end of January and the beginning of February 2012 I spent 6 days in Japan. Within the 'Young Academics Invitation Scheme' framework – an exchange program between the Robert Schuman Centre for advanced studies (European University Institute of Florence) and the Tsuda College and Eusi of Tokyo – I had the honour and the privilege to visit the Tsuda College in Kodaira (Tokyo). The purpose of my visit was both to provide an intensive course on the Economic History of the European Integration (from the 1st to the 3rd of February), and to take part to an international workshop dedicated to the 'Euro and Italian Economy' (the 4th of February).

Established 112 years ago by Umeko Tsuda, a pioneer of women's education in Japan, the Tsuda College is an unique place where the original aim of the women's emancipation is pursued throughout the high quality of the human capital, the peaceful environment granted by the beautiful campus where I had the chance to stay, and the excellence of the academic structures.

Talking about human capital, I think it is important to spend some words on the President of the College, Professor Masako Iino, a woman I had the chance to meet at the very beginning of my stay in Kodaira and who impressed me with her sophisticated balance of humor, kindness and hospitality, three qualities that are among the best resources of the Japanese tradition. The relationship with Professor Takamoto Sugisaki, his sincere interest in my work, his reassuring presence at each stage of my experience at the College, are among the best memories I brought back from Tokyo. Last but not least, I cannot forget the helpful guidance – from the beginning to the very end of my stay in Tokyo – of Ms. Akiko Kariatsumari and her colleagues of the Tsuda College's Centre for International Exchange (CIE). Since the first day, I found in this very nice woman and her team a reference point for all my needs, from the excellent coffee they provided for me in the morning, to the solution of all the logistical problems before, during and after my visit to Japan.

During my days in Tsuda College, I was hosted in the excellent Kodaira Campus' Guest House that, provided of all comforts, offered the perfect conditions to prepare my lectures and to have a rest after intense and amazing days.

Despite my very busy schedule, thanks to Professor Sugisaki, Ms. Kariatsumari, and some students, I had the privilege to discover some of the beauties of Tokyo (in particular the historical quarter of Asakusa), to feel the charm of an unique city, and to enjoy the delicious Japanese food, so essential for the comprehension of the national culture.

The original title of the course I dispensed was ‘An Economic History of European Integration’. Since the beginning, therefore, I realised that a mere economic approach at the history of the economic integration could have proved inadequate for my audience, composed by student with different backgrounds. Moreover, a history of the European integration could not start from 1945. That’s why, after giving my students a very general institutional framework of what Europe is today, I started my course from the end of the so-called ‘Great War’, analysing the mistakes which were partially responsible for the tragedy of the Second World War. After dealing with this historical background, I started my ‘institutional’ course on Economic European Integration focusing on the following points: 1) the aftermath of the Second World War and the interaction between the Cold War and the European integration process (1940s–1950s); 2) the difficulties of the 1960s, in particular the tensions between France and the United Kingdom; 3) the so-called ‘Eurosclerosis’ of the 1970s; 4) the main policies of the European Economic Community, in particular the Common Agricultural Policy and the Cohesion Policy.

During the 18 hours of the course the students were not only very educated and cooperative, but also pro-active. When I decided to dedicate one lecture to them, asking to present, on voluntary basis, a brief paper who was related to the course, four students out of seven decided to intervene, giving me very interesting feedbacks and providing further elements of analysis to their colleagues. On the whole, I was fully satisfied of the student attitude and their answer to my stimulations.

In addition to the lectures mentioned above, Professor Sugisaki organised a workshop that took place the 4th of February in Sendagaya Campus, located in the centre of Tokyo. The possibility of a satellite transmission with Koidara campus enabled the students to follow the discussion. The workshop was related to the ‘Euro and the Italian Economy’. Thanks to professor Sugisaki’s commitment, a panel of excellent scholars and qualified officials discussed around a series of possible implications of the European crisis. The workshop was opened by an enlightening lecture of Professor Naoyuki Yoshino, a prestigious Japanese economist of the Keio University, that dealt with ‘The Government Bond Markets in the Euro area and Japan’. The lecture of Daniele Bosio, head of economic and commercial section of the Italian Embassy in Japan, dealt with the topic of the ‘Italian Economy and the Euro Crisis’, an issue on which Corrado Molteni, *attaché* for academic and cultural affairs of the Italian Embassy in Japan, added further useful considerations. I had the task to finish the interesting workshop, giving to the discussion a historical perspective and dealing with the problem of ‘The Construction of the Monetary Union and the Euro. Yesterday, Today... and Tomorrow’. Thanks to the chair (Professor Sugisaki), the discussants (Sara Konoe, Assistant Professor at the Meiji University, and Hitoshi Suzuki, Lecturer at the University of Niigata Prefecture), and the audience, composed by Japanese and European scholars and pundits, the workshop proved intense and stimulating. I could not imagine a better end of my Japanese academic experience.

In Japan, namely in Tokyo, there is a College were – since 1900 – people work at their best to empower Women position into the Japanese society, with the hope to eventually improve the quality of this one. I had the privilege to witness this effort, I was part of it – even if for a very short period. I'm grateful to the Tsuda College for giving me this opportunity. I hope, sooner of later, to come back to Tokyo and continue this fruitful and promising dialogue.

INDEX

組織

- > 紹介
- > ごあいさつ
- > 組織図

研究交流活動

- > 研究活動
- > 講演、公開講座
- > その他

ライブラリー

- > 概要
- > アクセス

LINK

- > [リンク](#)

お問い合わせ先：EUSI 津田塾

〒187-8577
東京都小平市津田町2-1-1
津田塾大学 EUSI事務局分室
TEL&FAX: 042-342-5134
E-mail: eusi@tsuda.ac.jp



研究交流活動

写真提供：欧州委員会

[トップページ](#) > [研究交流活動](#) > [その他](#) > [集中講義](#)

集中講義「EU特別講義b」「EU特別研究b」

集中講義「EU特別講義b」「EU特別研究b」

“The Economic History of the EU”

Dr. Giuseppe Telesca
European University Institute

日付: 2012年2月1日(水)~4日(土)
場所: 津田塾大学 小平キャンパス

2/1(水)

10:30-12:00	1.	The Aftermath of the Second World War: Reconstruction, Reconciliation, and Integration in Europe between the middle of the 1940s and the end of 1950s
13:00-14:30	2.	
14:40-16:10	3.	The Ages of Uncertainty: from the Empty Chair Crisis to the Hague Summit (end 1950s-end 1960s, I)
16:20-17:50	4.	

2/2(木)

10:30-12:00	5.	The Ages of Uncertainty: from the Empty Chair Crisis to the Hague Summit (end 1950s-end 1960s, II)
13:00-14:30	6.	
14:40-16:10	7.	A Community in Flux (end of the 1960s, middle of the 1980s)
16:20-17:50	8.	

2/3(金)

10:30-12:00	9.	From the European Community to the European Union, 1985-1993
13:00-14:30	10.	
14:40-16:10	11.	Enlargement and Constitutional changes since 1994
16:20-17:50	12.	

2/4(土)

13:00-14:30	13.	Workshop: The Construction of the Monetary Union and the Euro. Yesterday, Today ... and Tomorrow?
14:40-16:10	14.	
16:20-17:50	15.	

> [シラバス\(詳細\)](#)

Syllabus

The European integration process started in the aftermath of the Second World War, when the European continent was destroyed by the conflict and definitively deprived of its centrality. Together with the secular division between Germany and France, and along with the tragedies of the war, a new political divide split the European continent starting from 1947. The Cold War divided the communist front from the anti-communist one, conditioning the position of the great European political families – the conservative, the liberal, the social-democrat and the communist – vis-à-vis the integration process of the Europe, at least since the middle of the 1970s. If the URSS saw at the European integration process with suspicion, the United States' attitude was totally different and, at least at the beginning, very enthusiastic. The Marshall Plan, consistent with the European project, was the symbol of the initial American proclivity vis-à-vis the European project. Therefore, when the Europe started to be considered as a potential competitor, and not only as a partner, the American actors (i.e. government, business community, etc.) became more cautious towards the European construction. The British attitude with respect to the European integration was ambiguous, and always subordinated at the 'special relationship' with the United States. Consequently, the British government was never a strong supporter of the European Community, even if finally entered it in 1973, after a long and difficult negotiation.

The course provides a long-perspective view on the European integration process, a path that, through a series of 'stops and go', firstly created the European Community, then, during the last two decades, originated an European Union and – within it, and only for some of its members – a Monetary Union. Analysing the stages of the European construction, involves a further effort, that is to say describing the different approaches adopted to realise the European integration. In few words, we can distinguish a 'federalist' approach from the one hand, and a 'functionalist' and pragmatic one from the other. The prevalence of the latter with respect to the former, can explain some weakness of today European Union which – as we have recently seen – seems missing a popular legitimacy, and acts as a technocratic entity more than a democratic one. To talk about the European integration in this sense means, then, to provide an in-depth analysis of the European society. A large space will be devoted to this matter in order to assess whether, sixty years after the end of the Second World War, the European integration process has been able to build a common European identity.

INDEX

組織

- [紹介](#)
- [ごあいさつ](#)
- [組織図](#)

研究交流活動

- [研究活動](#)
- [講演、公開講座](#)
- [その他](#)

ライブラリー

- [概要](#)
- [アクセス](#)

LINK

- [リンク](#)

お問い合わせ先：EUSI 津田塾

〒187-8577
東京都小平市津田町2-1-1
津田塾大学 EUSI事務局分室
TEL&FAX: 042-342-5134
E-mail: eusi@tsuda.ac.jp



研究交流活動

写真提供：欧州委員会

[トップページ](#) > [研究交流活動](#) > [研究活動](#) > [EUSI津田 International Workshop](#)

EUSI津田 International Workshop

EUSI津田 International Workshop
“Euro and Italian Economy”

セッション1 講演

“Italian Economy and the Euro Crisis”

ダニエレ・ボズィオ
イタリア大使館 一等参事官経済商務部長

コッラード・モルテーニ
イタリア大使館 学術・文化担当官



“The Construction of the Monetary Union and the Euro. Yesterday ... and Tomorrow?”

ジョゼッペ・テレスカ
EUI ロベール・シューマン・センター ジャン・モネ研究員



“The Government Bond Markets in the Euro area and Japan”

吉野 直行
慶應義塾大学 経済学部 教授



セッション2 ディスカッション

Chair 杉崎 京太 (津田塾大学 国際関係学科 教授)

ダニエレ・ボズィオ (在日イタリア大使館 一等参事官経済商務部長)

コッラード・モルテーニ (在日イタリア大使館 学術・文化担当官)

ジョゼッペ・テレスカ (EUI ロベール・シューマン・センター ジャン・モネ研究員)

神江 沙蘭 (明治大学 国際日本学部 特任講師)

鈴木 均 (新潟県立大学 国際地域学部 講師)

日時: 2012年2月4日(土) 13:00-17:00

場所: 津田塾大学 千駄ヶ谷キャンパス 津田ホール1F 会議室 T104

言語: 英語

参加費: 無料 (申込要)

申し込み・問い合わせ先: EUSI津田分室

E-mail eusi@tsuda.ac.jp TEL 042-342-5134

EUSI (EU Studies Institute) 東京

津田塾大学 千駄ヶ谷教育研究機構プロジェクト

Copyright (C) EUSI TSUDA.

英語による講義・発表研修プログラム



英語で行う講義、国際会議での発表等に対応するためのアイデアや技術についてブリティッシュ・カウンシルの講師がご説明します。
効果的な講義設計、プレゼンテーションスキルを身につけることを目指します。
ぜひご参加ください。

日時： 2月23日（木）9:30～17:00
会場： 7号館 7308教室
内容： 講義とプレゼンテーション
費用： 無料
対象： 本学教員

※ 当日のスケジュールは裏面をご参照ください。

ご参加の場合は、講義資料準備の都合上、cie@tsuda.ac.jp宛に 2月20日（月）までにメールをお送りください。



Lectures and Presentations Course

The course is designed for Academic staff who are required to teach their subject through English. As such, it does not cater to teachers or professors of a specific field. Rather, it is designed for academics of any subject as the 'soft' skills, methodologies and language input can be used for teaching any field of study.

Lectures and Presentations Course will enable academic staff to organise and structure lectures or academic presentations in a clear, logical and easy to follow way. Course participants will also learn the language needed to open and close lectures or presentations effectively and deliver a coherent message. In addition, participants will be taught how to use visuals, their voice, and their body language to aid understanding.

Materials

All materials used on the course will be created in-house by British Council teachers in consultation with the university.

Course Outline

	Lesson	Contents
Starts 9:30	Lectures/presentations Part 1 Organisation and Structure	<ul style="list-style-type: none"> • Organisation of ideas • Evaluating relevance • Logical structuring - opening, body, conclusion
	Lectures/presentations Part 1 Coherence	<ul style="list-style-type: none"> • Effective openings • Signposting • Summarising and closing • Dealing with questions • practice
	Lectures/presentations Part 2 Using Visuals	<ul style="list-style-type: none"> • Guidelines for using visuals • Referring to visuals • Describing complex data • Practice
Ends 17:00	Lectures/presentations Part 2 Delivery	<ul style="list-style-type: none"> • Using stress and intonation • Using body language • Using notes • practice

Japanese Studies in English: Political Economy [後期 週2時間 2単位]

杉崎 京太

講義内容

The aim of this lecture is to think about the Japanese Political Economy in Asia under Globalization since the 1980s from several viewpoints.

授業計画

- (1) Fri, 16 Sept., 2011 “Japanese Economy under Globalisation: Economic History after WWII”
Takamoto Sugisaki (Tsuda College)
Introduction to the economic history of Japan after WWII,
1. Post-War reconstruction under the US Economic Umbrella
2. Export-oriented growth and demand-pull growth
3. Survival from stagflation and Myth of Japanese Economy
4. Plaza Accord and the bubble economy
5. Collapse of the bubble and the long depressed days
6. Towards an open economy under US-oriented globalisation
- (2) Fri, 16 Sept., 2011 “Japanese and Asian Economy under Globalisation: Meaning of the Globalisation Today” Takamoto Sugisaki (Tsuda College)
Introduction to the Theoretical Debate on the Globalisation today and its meaning to the Asia
1. Meaning of the Globalisation
2. Asia in the Globalisation
3. Japan in the Globalisation today
4. Crisis and After
- (3) Fri.30 Sept., 2011 “Japanese Economy in Asia” Hisashi Yokoyama (Tsuda College)
- (4) Fri.30 Sept., 2011 “Japanese Economy with ASEAN” Hisashi Yokoyama (Tsuda College)
- (5) Fri.07 Oct., 2011 “The significance of studying Modern China: reconsideration of the relationship between China and Japan” Motoya Nakamura (Tsuda College)
This lecture aims to help students reconsider Japanese perceptions of Contemporary China
1. Diversity in Modern China
2. Chinese Modern History and Contemporary Chinese Politics
<Fri. 14 Oct. Conference of the “EU, Japan and Asia Day” >
- (6) Fri. 21 Oct. “Japan and the WTO” Yukari Akeda (Keio University)
1. Why free trade? Lessons in 1930s
2. The Development of the WTO
• Institutional development
 Basic principles
 From soft regime to hard regime
 The Dispute Settlement Body: a jewelry of the Crown
• Development of trade agenda: from traditional to post modern agenda
3. Japan and the WTO
• Japan’s position in Multilateral Trade Negotiations
• DSB cases: Aggressive legalism?
- (7) Fri. 28 Oct. 2011 “The Cold War in Asia: Its Origins, Development and Diverse Courses” Daisuke Hayashi (Graduate School, Keio University) (TA) with Sugisaki
In this lecture, we will learn how the structure of the Cold War had been formed and developed in Asia. Particularly, this lecture focuses on Japan and three other Asian states to be divided in the Cold War process: China, Korea and Vietnam. The US tried to extend her influence over Asia by the bilateral alliances with Japan, Korea, Taiwan, and the Philippines. How such American “hub-and-spoke system” had been formed? On the other hand, within the Communist bloc, China and Russia had initially formed the mutual friendship and assistance alliance, but later went into split. How their conflict

influenced the Cold War in Asia? And how the Cold War in Asia became “hot” wars in Korea and Vietnam?

1. The origins of the Cold War in Asia, 1945-1953: Japan, China, Korea, Vietnam

2. The development of the Cold War in Asia, 1953-1975: China and Vietnam War and the U.S.

(8) Fri. 4 Nov. “Financial History after 1980s in Japan” Hideki Hayashi (Keio University, Mizuho Financial Holdings)

The bubble in Japan and the integration in Europe

1) The cause and the effect of the bubble in Japan

2) The development of the European integration 3) How the Japan-EU economic relations after 1980's Keywords: The real estate bubble, The lost decade in Japan, The single market, The Maastricht Treaty

(9) Fri. 18 Nov. “Asian Currency Crisis and After: Asian Economy in Globalisation” Hideki Hayashi (Keio University, Mizuho Financial Holdings)

The development of regional cooperation and globalization in Asia

1) The cause and the effect of the Asian crisis

2) The response of Japan and EU towards the Asian crisis 3) How Asia is coping with the recent financial crisis

Keywords: ASEAN, ASEM, The Lehman shock

(10) Fri. 25 Nov. “After the End of the Cold War: Comparative Studies between Europe and East Asia” Hiroshi Inooka (Keio University)

How does regionalism differ in Europe and Asia? This lecture aims to enhance our understanding of European Union-East Asia relations and of European and Asian regional integration in a comparative context. We will explore a brief history of European Integration and its implications for recent efforts to strengthen regional cooperation in East Asia.

Reference: Murray, Philomena ed. Europe and Asia: Regions in Flux, London: Palgrave Macmillan 2008.

(11) Fri. 2 Dec. “KAROSHI in Japan: Comparative Studies” Hiroshi Kawahito (Lawer)

What is Karoshi?

Karoshi means death from overwork.

Why has the number of people committing suicide increased in Japan?

What is the relation between the unemployment rate and suicide rate?

This lecture aims to help students understand Japanese management style, workers' condition and work-related illness. Karoshi is related to human rights issues. At the same time it is an issue of management policies and ethics.

Key words: Karoshi, suicide

(12) Fri. 9 Dec. “Changing Employment System in Japan and Korea” Nobuko Yokota (Yamguchi University)

How has the employment system in Japan and Korea changed with the spread of globalization in East Asia? Japan and Korea's working society faced a turning point in 1997 when the Asian currency crisis broke out. The economic depression and the turmoil caused by the currency crisis led to a rapid weakening of labor unions, enabling the government and large corporations to carry out a policy of bringing more flexibility into the domestic labor markets of larger companies. As a result, a rapidly growing portion of the labor force was faced with the prospect of becoming “non-standard workers” both in Japan and Korea In this lecture, we will examine industrial relations, employment models, family structure and social protection system in Japan and Korea in conjunction with the structural changes in the labor market during that period, comparing both countries.

Key words: Employment System, Globalization, Deregulation in Labor Market, Non-Standard Workers

(13) Fri. 16 Dec. “Japanese Finance Structure and the National Debt” Naoyuki Yoshino (Keio University)

(14) Fri. 16 Dec. “Current State of the Japanese Economy, Financial System and Policy Proposals for Japan to Recover” Naoyuki Yoshino (Keio University)

1. Huge Budget Deficits, Ageing Population

High demand for JGB (Government Bond)
2. Infrastructure Investment (Public Works)
Private Public Partnership
3. FDI from Japan to China and South East Asia
4. Japan's Banking Behavior
Basel minimum capital requirement ratio
5. SME database and SME finance
6. Asian Capital Flow
(15) Fri. 23 Dec. "Japanese Foreign Aid in Asia"
(Ad) Fri. 13 Jan. Conclusion Sugisaki & Yokoyama

テキスト

参考書

評価方法

Report (60%) and Participation and Contribution in classes (40%)
Active participation is highly encouraged in the class. Participation will be evaluated on the basis of regular attendance with active engagement especially taking initiatives in raising questions and issues, and active participation in class discussion as well.
Assessment: report on a topic (1,500 words) at the end of the term. Students will select a topic raised by the lectures.

オフィスアワー

その他

備考

最終更新日:2011年03月16日

[前のページへ戻る](#) | [トップページへ戻る](#)

©津田塾大学 Tsuda College 2011. All rights reserved.
〒187-8577 東京都小平市津田町2-2-1 津田塾大学 教務課
Tel. 042-342-5130

講義内容

The aim of this lecture is to think about Japan from diversified view points and to shake a view of self-confidence made in Japan to show something that Japanese students cannot be recognised by themselves because of being enclosed in some structure within the Japan-centred thinking. It is highly recommended that participants attend both classes of “Political Economy” and “Literature, Culture and Society”, as different methods and materials will be introduced to understand Japan in Asia today.

授業計画

(1)Wed.14, Sept. 2011 “Comparative humour and the perceptions of WWII, between British and Japanese 1” (Tentative) Prof. Alan G. Milne

(2)Wed.14, Sept. 2011 “Comparative humour and the perceptions of WWII, between British and Japanese 2” (Tentative) Prof. Alan G. Milne

(3)Sat. 17 Sept., 2011 “Japanese Literature and Society: History 1”
Dr. Kamei (Hitotsubashi Univ.)

“Japanese Literature and Society: History 1: The Emergence of a Literary Tradition: From Oral Tradition to Earlier Writings”
The introduction of Chinese characters had an enormous influence on the development of writing styles and literary works in Japan. On the one hand, a writing style based on modifying classical Chinese and adapting it to the needs of ancient Japanese society (kanbun) emerged. On the other hand, a wholly new form of writing (manyogana) also evolved. The oldest historical record, Kojiki, chronicles events relating to the royal family as well as various stories pertaining to the court or the origin of the country. Shortly thereafter, another historical record – Nihon Shoki – was also produced. What did the creation of these “historical records,” compiled under the leadership of the royal family, mean? Furthermore, the two oldest anthologies of poetry by Japanese – one written in classical Chinese, and the other in man'yogana – were compiled around the mid-8th century. What do they cover, and what can they tell us about the time? How did contemporary people feel and think? Through reading some of these works and examining the historical background behind their creation, we will explore the actual conditions of ancient Japanese society.

Major literary works to be discussed:

Kojiki (Record of Ancient Matters), Nihon Shoki (Chronicles of Japan), Kaifuso (Fond Recollections of Poetry), Man'yoshu (Collection of Ten Thousand Leaves)

(4)Sat. 17 Sept., 2011 “Japanese Literature and Society: History 2”
Dr. Kamei (Hitotsubashi Univ.)

“Japanese Literature and Society: History 2: Moving Towards a “National Literature”: Tales of Ladies-in-Waiting”
While classical Chinese characters came to be considered the writing style for official purposes, literary work written in kana also emerged from the early 10th century. While kana became seen as the “woman’s hand,” there were cases where male officials pretended to be women and produced kana works such as Tosa Nikki. The spread of kana also led to not only royal poetry anthologies (beginning with Kokin Wakashu), but also numerous tales written by ladies-in-waiting serving at the court. The world of kana literature led by these ladies led to some of the most famous Japanese literary works, including Genji Monogatari. What kind of social conditions brought this about? How did these tales reflect contemporary society? By discussing some of the works of this emerging “national literature,”

we will seek answers to these questions.

Major literary works to be discussed:

Tosa Nikki (The Tosa Diary), Ise Monogatari (The Tales of Ise), Makura no Soshi (The Pillow Book), Okagami (The Great Mirror), Genji Monogatari (The Tale of Genji), Kagero Nikki (The Gossamer Years)

(5) Sat. 17 Sept. 2011 "Japanese Literature and Society: History 3"
Dr. Kamei (Hitotsubashi Univ.)

"Japanese Literature and Society: History 3: Between Two Politics: Continuities in a Changing Society"

The courtly culture carried by ladies-in-waiting changed along with the decline of regent politics. Although authority remained with the sovereign, actual political power shifted to retired sovereigns, and eventually to the hands of the Kamakura Bakufu, the first warrior government established at the end of the 12th century. On the one hand, such major social change led people to turn critical eyes upon society; on the other hand, it also produced a longing for the court-orientated culture of the past. At the same time, the compilation of royal anthologies begun with the Kokin Wakashu continued, resulting in as many as 21 royal anthologies. At a time when two politics co-existed, what motivated the commissioners and compilers of anthologies to keep producing these works? At the end of the first week, we will consider how the long-enduring Kyoto-centered culture changed in the wake of the establishment of the Kamakura Bakufu, and what effect this had on the evolving literary tradition.

Major literary works to be discussed:

Hojoki (An Account of My Hut), Tsurezuregusa (Essays in Idleness), Towazugatari (The Confessions of Lady Nijo), several royal anthologies

(6) Sat. 24 Sept. 2011 "Japanese Literature and Society: History 4"
Dr. Kamei (Hitotsubashi Univ.)

"Japanese Literature and Society: History 4: Military Tales: Warriors in Literature and History"

After the emergence of the warrior class, military tales that depicted the activities of warriors came into prominence. Most military tales were based on actual history but were written long after the events they described, and their authorship tends to be unknown. However, many of them became well-known works familiar to contemporary people, who experienced them through unprecedented methods of diffusion such as recitation or lectures. What were the reasons that such military tales were written and became so widespread across society for centuries? What kinds of concepts or beliefs of the time were represented in the depiction of warriors in such tales? We will consider the emergence of warriors and their roles from the Kamakura through early Muromachi periods, and how these were understood in contemporary society.

Major literary works to be discussed:

Heike Monogatari (The Tale of the Heike), Taiheiki (A Chronicle of Great Peace), Mokoshurai-e (Scrolls of the mongol invasion of Japan), Gukansho (The Future and the Past), Jinno Shotoki (A Chronicle of Gods and Sovereigns)

(7) Sat. 24 Sept. 2011 "Japanese Literature and Society: History 5"
Dr. Kamei (Hitotsubashi Univ.)

"Japanese Literature and Society: History 5: The Revival of the Classics and the Popularization of Literature"

Since the fall of the Kamakura Bakufu and the establishment of the second warrior government (the Muromachi Bakufu), studies of the classics became tremendously popular. Simultaneously, several literary and artistic forms such as Noh plays or renga (linked verse) which had been growing from earlier times achieved new heights of their own, while adapting concepts and elements from earlier works of literature. What resulted was a new literary world which was more

inclusive in terms of its participants, and which produced professionals who worked to spread literary culture across the country. What kind of role did literature have for people at the time? How did the classical literature from earlier eras affect cultural and social activities? What did the popularization of literature represent? Through discussing these issues, we will come to a better understanding of this fascinating era.

Major literary works to be discussed:

Various Otogi-zoshi (illustrated short narratives), Noh plays, Renga (linked-verse)

(8) Sat. 24 Sept. 2011 "Japanese Literature and Society: History 6"
Dr. Kamei (Hitotsubashi Univ.)

"Japanese Literature and Society: History 6: Entertainments for, by, and of Townsmen: The Seeds of Modern Society"

The establishment of the third warrior government, the Tokugawa Bakufu, in 1600 ushered in a peace which endured for some 250 years. During this time, much of what we now call "Japanese traditional art/literature" - like joruri, kabuki, haikai, and ukiyo-zoshi - was born. The same forces that gave birth to these new cultural developments also had an enormous impact on the form and content of literature. At the center of this new cultural world were the townsmen. How did this social class contribute to these developments? What were the defining characteristics of the cultural activities of the era? Through examining a range of works we will discuss these issues and begin to understand how the literature of this era influenced our modern society.

Major literary works to be discussed:

Koshoko Gonin Onna (Five Women Who Loved Love), Oku no Hosomichi (The Narrow Road to the Deep North), Ugetsu Monogatari (Tales of Moon and Rain)

< Fri. 14 Oct. Conference of the "EU, Japan and Asia Day" >

(9) Fri. 4 Nov. "Human Rights in Japan 1" Dr. Paul Bacon, Associate Professor, Deputy Director, European Union Institute in Japan, Waseda University.

(10) Fri. 18 Nov. "Human Rights in Japan 2" Dr. Paul Bacon, Associate Professor, Deputy Director, European Union Institute in Japan, Waseda University.

(11) Fri. 2 Dec. "Regional Cooperation in East Asia" Dr. Min Shu
This lecture examines regional cooperation in East Asia, including both Northeast and Southeast Asia. It intends to introduce students to the contemporary development and current debates on East Asian regionalism. Special emphasis will be put on the regional initiatives after the Asian financial crisis in 1997-1998.

Key words: Regionalism, East Asia, Southeast Asia

Text/Reference books:

MacIntyre, A.; Pempel, T. J. and Ravenhill, J. (eds.) (2008) Crisis as Catalyst: Asia's Dynamic Political Economy, Ithaca: Cornell University Press.

Pempel, T. J. (ed.) (2005) Remapping East Asia: The Construction of a Region, Ithaca: Cornell University Press.

(12) Fri. 9 Dec. "Promoting Reconciliation between China, Korea and Japan" Dr. Min Shu

This lecture discusses the historical background and contemporary development of inter-state relations between Japan, Korea and China. By examining the connotations of reconciliation from different analytical perspectives, the lecture aims to help students to explore the question of how to achieve reconciliation among the three most important countries in Northeast Asia.

Key words: International Relations, Reconciliation, Northeast Asia

Test/Reference books

Calder, Kent and Min Ye (2010) The Making of Northeast Asia, Stanford, California: Stanford University Press.

Rozman, Gilbert (2004) Northeast Asia's Stunted Regionalism: Bilateral Distrust in the Shadow of Globalization, Cambridge: Cambridge University Press.

(13)Fri.23 Dec. “Global Culture - A Comparative View of Technical Cultures” Mr. Makoto Yashiro

Elaborative effort is required to bring technologies into successful business, and understanding cultures is one of the key items for the success in business in today's global business environment. The lecturer has various experiences in global research and development organizations including ThinkPad notebook computer development in IBM. Based on these experiences in the real world, various aspects related to cultures will be discussed. The discussion will include the difference of cultures by geography in such as thought processes of researchers and engineers, and market and customer preferences, as well as the needs of standardization from the view of product development.

(14)Fri. 13 Jan. Invitation Lecture by Professor Burgess

テキスト

参考書

評価方法

Report (60%) and Participation and Contribution in classes (40%)
Active participation is highly encouraged in the class. Participation will be evaluated on the basis of regular attendance with active engagement especially taking initiatives in raising questions and issues, and active participation in class discussion as well.
Assessment: report on a topic (1,500 words) at the end of the term. Students will select a topic raised by the lectures.

オフィスアワー

その他

備考

最終更新日:2011年03月16日

[前のページへ戻る](#) | [トップページへ戻る](#)

©津田塾大学 Tsuda College 2011. All rights reserved.
〒187-8577 東京都小平市津田町2-2-1 津田塾大学 教務課
Tel. 042-342-5130

千駄ヶ谷教育研究機構 千駄ヶ谷キャンパス国際交流プロジェクト

シンポジウム

途上国とつながる：女性起業家に学ぶ

開催日： 2012年1月28日（土）

時間： 9:00～12:00

場所： 津田塾大学 千駄ヶ谷キャンパス

津田ホール 1F 会議室 T101, T102

参加費： 無料

申込： 事前申込不要



問合わせ先:
津田塾大学 国際センター
E-mail: cie@tsuda.ac.jp

プログラム

前半の部

9:00～ 9:05	本日の案内
9:05～ 9:10	飯野正子学長挨拶
9:10～ 9:20	横山久国際関係学科教授 趣旨説明・パネリスト紹介
9:20～ 9:40	大野泉氏基調報告 「開発とビジネス：パートナーシップで世界の貧困に挑む」
9:40～ 9:50	大野氏に質問・回答
9:50～10:05	小澤里恵氏報告 「ルワンダの女性達と行うフェアトレード・ビジネス」
10:05～10:20	功能聡子氏報告「社会的投資で途上国と日本をエンパワー」
10:20～10:35	小林りん氏報告「感じる力、考える力、突破する力 ～軽井沢から発信する、次世代の国際教育～」

休憩

10:36～10:55	休憩（19分）
-------------	---------

後半の部

10:55～11:05	小林氏に質問・回答
11:05～11:15	功能氏に質問・回答
11:15～11:25	小澤氏に質問・回答
11:25～11:40	総合質疑応答、または討論
11:40～11:45	閉会のあいさつ

参加パネリスト

- 大野 泉** 政策研究大学院大学教授 近（共）著『BOP ビジネス入門』中央経済社
石井 梨紗子 東京大学大学院助教 専門分野 行政・組織開発、人材育成
功能 聡子 ARUN 代表 カンボジアへの社会的投資の仕組み会社 ARUN 設立
小澤 里恵 ルイズビィ代表 ルワンダのバスケットの日本へのフェアトレード
小林 りん インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢設立準備財団 代表理事

シンポジウム「途上国とつながる：女性起業家に学ぶ」
(2012年1月28日(土)午前 於津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス)

パネリスト プロフィール

発表順



大野 泉

政策研究大学院大学 教授

最近（共）著『BOP ビジネス入門』中央経済社。津田塾大学、プリンストン大学ウッドロウ・ウィルソン・スクール行政政策大学院、JICA、世界銀行、JBICなどを経て2002年より現職。国際開発動向・東アジアの開発経験・アフリカ成長分析やODA改革に取り組み、理論と開発援助の現場とをつなぐ活動を目指す。



石井 梨紗子

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム助教

津田塾大学、東京大学大学院総合文化研究科、UFJ総合研究所（現三菱UFJリサーチ&コンサルティング）を経て、援助政策研究を行う一方、開発コンサルタントとして東南アジア、アフリカ等でODA案件に従事。2011年マンチェスター大学にてPh.D.取得。2010年より現職。



小澤 里恵

ルイズビィ社長

インテリア専門学校、実家のソファ製造会社を経て、2009年ルイズビィを設立し、社長に。日本国内の百貨店やインテリアショップでルワンダの美しい編み物アガセチェ（ひょうたん型のかご）、バスケットなどをフェアトレードで販売する。



功能 聡子

ARUN 代表

国際基督教大学、ロンドン政治経済大学院卒。民間企業、アジア学院を経て1995年よりカンボジアに在住、NGO、JICA、世界銀行等を通して復興・開発支援に携わる。2009年途上国に向けた社会的投資の仕組みを作るためARUN設立。エンパワーメントと持続的な発展につながる新しい開発協力のスキームを構築中。



小林 りん

インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢設立準備財団 代表理事

カナダの全寮制インターナショナルスクール、東京大学、ベンチャー企業経営、JBIC、スタンフォード大学国際教育大学院、ユニセフなどを経て、2009年より現職。日本とアジアそして世界の子供たちが共に暮らし学ぶ、全寮制スクールを軽井沢に誕生させる。

趣意書

シンポジウム「途上国とつながる：女性起業家に学ぶ」

(2012年1月28日(土)午前 於津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス)

津田塾大学 千駄ヶ谷教育研究機構

千駄ヶ谷キャンパス国際交流プロジェクト

途上国と連携して活躍している女性起業家に学び、世界を変える試みに参加してみませんか！

近年、途上国、なかでも新興国BRICsなどの隆盛への関心と同時に、途上国においてこれまで援助の受け取り手としてしか見られてこなかった現地の人々の新しい可能性に注目が集まっています。それは、途上国内部から生まれてきている起業家、あるいは貧困層の可能性、さらには彼らを対等なパートナーとして認め、彼らと協調し連携しようという考え方です。それが故に、マイクロファイナンスやBOP（ボトムあるいはベースラインオブピラミッド）あるいはインクルーシブなどの用語が著作や記事の表題に使われるようになってきています。

この中であって、日本人女性の活動ぶりが目立っています。閉塞感漂う日本社会において、日本人女性たちはその培ってきた知性とダイナミックな行動力によって飛躍し、途上国とつながりつつ新しいアイデア・可能性に挑み、世界を変えようとしています。

現地の人々の起業を促すために現地にマイクロファイナンス会社を設立したり、自ら起業し、途上国の現地の人々や材料を使い日本の市場に新しい製品を持ち込んだり、さらには途上国の若者に新しい教育の機会を提示したり、さらには現地でソーシャルエンタープライズを立ち上げたり、と様々な分野で多くの日本の女性たちが活躍の場を広げています。

一方、本学においても、学生達は伝統的に途上国との連携に熱心です。フェアトレード、現地孤児院への支援、Study for Two, Table for Two、アイセックなどの活動が課外でも熱心に行われてきましたし、現在でも行われています。また、途上国とつながるこうした分野には多くの卒業生も携わっており、今は直接には活動はしてはいないものの近い将来積極的に携わろうという希望を持っているOGもおられます。

そこで、活躍する女性起業家たちに千駄ヶ谷キャンパスにお越し願ひ、自らの学生時代からのご経験やキャリアパスさらには途上国との連携の将来の可能性について、お話頂きます。特に、起業にいたるまでの楽しさとご苦労、その技術・手法などについて具体的にご指導いただければ、現在途上国とつながり活躍中の、あるいはこれからこの分野に挑戦しようという学生達、卒業生には大いに参考になると思われます。同時に、学生達・卒業生とも実際に懇談し、鼓舞し、勇気付けていただきたいと思います。

津田塾大学千駄ヶ谷キャンパスにおいてこのような対話を積み重ねることは、日本人女性がその活力をさらに磨き上げ、日本社会ひいては途上国そして世界の変化へと新しい可能性を切り開いていくことに貢献するものと期待されます。

国際関係学科教授 横山久

協力学生

国際関係学科 1年 中島祥

英文学科 1年 菅原悠衣子

国際関係学科 2年 櫻井秋那

国際関係学科 2年 小野晶恵

国際関係学科 2年 佐々木香璃

国際関係学科 4年 戸澤美咲